正徵 後漢文紀 七

浅井蔵書

平宣時朝臣(タヒラノノブトキアソン)の名ちかくなりぬるにや。
ようひのころほひよりはじめて。事あるごとに。
ゑぼしをれ乃ちかくてとくせしかど。
乃ちまたうねりやまず。我(ヨル)もれだにしらぬ。
一うじくのまくら(一うじ)をとりよせて。
てうしをうつくしくおりそへて。
あるじのおんがさうぞくをひとうち
ぬぎかけたるを。
ちかくまいりぬるひとびとの。
ゑぼし乃(ノ)掛(カケ)ものゝ小太刀(コダチ)などまで。
あまたかけつらねたるさまも。
いとゞ物(モノ)々(ノ)敷(シキ)ことうちそへて。
ゆゝしう侍(ハベ)りさふらひ(侍)の。
執権(シツケン)の人々(ヒトビト)。
貴(タフト)き卑(イヤシ)き乃(ノ)。
おのがさまざまに。

を植めざりし物語。季冬に繼氣もする時よりて
おごりゆくようなりしびよりし。寂阿もる所の比丘尼倹約
なるまし事をめる物語
也。東鑑云。治十五年自點安十年正安三年。北条五郎時忠後
改宣時。系圖ま時政 時房 朝直 宣時 執權 永門忠手殿 寂阿もる入道
時氏 泰時 経時 時賴 時宗 貞時 高時 守時
むしとまるしるす
ひとまるべれ
又寂阿もる所
妻ま異躰つくるりともせ
ちくとまるしるす
純正ふるうまる
ひとりあうべんがさうぐし
独ふんがまびをたうべた
砂ごとある時
高時をとりひせとる

ちくとまるしるす
純正ふるうまる
ひとりあうべんがさうぐし
独ふんがまびをたうべた
砂ごとある時
高時をとりひせとる

者よて鮑やある
ち燭さうぐし
くまんぐ
みそ 野ま俗よ味噌ともいふ
物なり
こう倹約ありしまる。季冬に寂阿もる所ま小条九
代の中の賢人なれど此時ふ
尼ぐやうぐし倹約なりしとぞ
寂阿もる入道 阿曇の社ま
使をたてりくまるふあるべ
なりそうや。一献 二献 三献よえ
くいりちいくやうねそ
じまの人ぐ。産せしまる
そあ物ふをとるくひとやさ

とてそのそめ給ふ女房どもかゝる御ありさまを見奉りて。なをさりがたくおぼしめしけるにや。ひそかに御ふみなどつかはしけるを。時政ほのかにつたへ聞て。いかゞ思ひけん。

寿永二年八月。木曾冠者義仲。朝日將軍と稱して。北陸道より發向の時。源廷尉義朝の舊好を思ひ。鎌倉の二品に對し奉らんがために。義朝の嫡男。悪源太義平の遺跡を興さんと欲す。仍て義平の舎弟。朝長。頼朝。希義。三人の公達を尋ね出し奉らんと欲す。朝長は。去る平治元年十二月。義朝と共に尾張國にて誅せられ。希義は。去る治承四年八月。伊豆國にて。平家の爲に討たれ給ひぬ。頼朝は。去る治承四年八月。石橋山の合戰に打負て。安房國へ渡り給ひ。其後武藏國に入給ひ。相模國鎌倉に居を占め給ふ。木曾義仲は。頼朝の舎弟なれば。頼朝を尋ね出し奉らんと欲す。

寿永二年八月。木曾冠者義仲。朝日將軍と稱して。北陸道より發向の時。源廷尉義朝の舊好を思ひ。鎌倉の二品に對し奉らんがために。義朝の嫡男。悪源太義平の遺跡を興さんと欲す。仍て義平の舎弟。朝長。頼朝。希義。三人の公達を尋ね出し奉らんと欲す。朝長は。去る平治元年十二月。義朝と共に尾張國にて誅せられ。希義は。去る治承四年八月。伊豆國にて。平家の爲に討たれ給ひぬ。頼朝は。去る治承四年八月。石橋山の合戰に打負て。安房國へ渡り給ひ。其後武藏國に入給ひ。相模國鎌倉に居を占め給ふ。木曾義仲は。頼朝の舎弟なれば。頼朝を尋ね出し奉らんと欲す。

寿永二年八月。木曾冠者義仲。朝日將軍と稱して。北陸道より發向の時。源廷尉義朝の舊好を思ひ。鎌倉の二品に對し奉らんがために。義朝の嫡男。悪源太義平の遺跡を興さんと欲す。仍て義平の舎弟。朝長。頼朝。希義。三人の公達を尋ね出し奉らんと欲す。朝長は。去る平治元年十二月。義朝と共に尾張國にて誅せられ。希義は。去る治承四年八月。伊豆國にて。平家の爲に討たれ給ひぬ。頼朝は。去る治承四年八月。石橋山の合戰に打負て。安房國へ渡り給ひ。其後武藏國に入給ひ。相模國鎌倉に居を占め給ふ。木曾義仲は。頼朝の舎弟なれば。頼朝を尋ね出し奉らんと欲す。

寿永二年八月。木曾冠者義仲。朝日將軍と稱して。北陸道より發向の時。源廷尉義朝の舊好を思ひ。鎌倉の二品に對し奉らんがために。義朝の嫡男。悪源太義平の遺跡を興さんと欲す。仍て義平の舎弟。朝長。頼朝。希義。三人の公達を尋ね出し奉らんと欲す。朝長は。去る平治元年十二月。義朝と共に尾張國にて誅せられ。希義は。去る治承四年八月。伊豆國にて。平家の爲に討たれ給ひぬ。頼朝は。去る治承四年八月。石橋山の合戰に打負て。安房國へ渡り給ひ。其後武藏國に入給ひ。相模國鎌倉に居を占め給ふ。木曾義仲は。頼朝の舎弟なれば。頼朝を尋ね出し奉らんと欲す。

寿永二年八月。木曾冠者義仲。朝日將軍と稱して。北陸道より發向の時。源廷尉義朝の舊好を思ひ。鎌倉の二品に對し奉らんがために。義朝の嫡男。悪源太義平の遺跡を興さんと欲す。仍て義平の舎弟。朝長。頼朝。希義。三人の公達を尋ね出し奉らんと欲す。朝長は。去る平治元年十二月。義朝と共に尾張國にて誅せられ。希義は。去る治承四年八月。伊豆國にて。平家の爲に討たれ給ひぬ。頼朝は。去る治承四年八月。石橋山の合戰に打負て。安房國へ渡り給ひ。其後武藏國に入給ひ。相模國鎌倉に居を占め給ふ。木曾義仲は。頼朝の舎弟なれば。頼朝を尋ね出し奉らんと欲す。

或ハ福貴者のごとく人を使ひ
くべき程ハ下知をなしいかゞ
迚をうんとおもひぐるしくまぢこと
しやんとして他のことを
信ぜざるハ人間常住の
と物をつゞ百万の銭ありとも
らんや。財ハ活ころ物あり。限ある財
をもちくうぢるハ死
ん事あり。我をなろばをべき
つまにつくしてをしまれて
銭をゆうづくしたくひもあらばと
かうハいへ共。其のごとく神のごとくをそれ

さいわひ
とうつるとも
せべ。居所をうごかさぬ
所をとくべしと
山路と大福長者が詞を挿判しく。畢竟福者ハ多
も物をつゞ理をわれた。福ものごとくたのしまんとおもふ
をんたちぬ。倹約をかゝるくくるあひの世
乃ちをつくり。おのれ倹約をかゝるくくるあひの世
物をつゞく倹約をかゝるくくるあひの世
りてうとものごとくおもひ
まへあしくぞ。倹約をかゝるくくるあひの世

絢として而利もとうるべし錢あり
のほのへあるべき支を指りして
とぜんとうりハ財あるべんよハ
大福長者　あるべき富饒の人をもちゐんとの
名義也　長者西土之豪族也　富商大賈積財鉅万咸称長
者　單言之亦通　利源あるべき
うるべしとそんとそまる
ま徳ーて　人多ハまるべき
住ーていよいよ悟よとぐべきの
ちうる利源をはくべきを
て　後世よりの人の用ふ

欲をかぎりなくして　欲をかぎりなくして
もし治をあり　もし治をあり
野云荘子養生主之中生也　而渥而知也　無涯以有涯隨無涯殆已
あるべき治物　あるべき
会　我をもうぼをべき
うるべしとの貧尾なり　而れどもとく朴乃ごとく
晋嚢銭神論曰親愛如兄弟字曰孔方失之則貧窮得之則富強
無翼而飛無足而走解嚴毅之顔開難發之口銭多者妻畏
銭少者君後　急時賑貧乃名士之所貴　銭亦福也　兼ねもけ福乃

ゆくろといくさまろ不あり　死のぞむとも
さまで金銀をたくはへ物ある。死ろうぞふれとものんべ
西東ふ〳〵く物をうくべし！　商人などを西東ろ
ねて得意をとーるなどもくまうぞなどもろ
てやむをく畢竟ろをはく奇よりてとの義ぺ　次ぺ
ろうふつきふろくふれふ　富乃ささうまろ
いそんとてろり野云易乾卦曰水流濕火就燥雲從龍風從虎ぺ
孟子云猶水之就下也　妻飲ろろ　妻云宴飲八酒宴ぺ
ろうろ八ろるふとぬろ云尚書仲虺之誥曰惟王不邮声色自娯
長恨哥傳玄宗深居遊宴以声色自娯　ふーとや記
大福ふんがいひーとぺ
抓人を西乳を成せんがーろあよ財をりとひ錢を財とろ
ろふ八乳をひとうろつるろ赤ぺ　ふ錢あるぺ
とらもらいぶろひろぺ　金多ちをぬめーぺ仍ろ樂と
せんぴふろてい西ぺ人ぺ望ぺ欲を願ーくたのーひとせんよりふ
西ろーんぺ　ふーと願ろろーんろ八癰疽を西ひもれ水よ洩ひて樂と
ふーと願ろろーんろ八癰疽を西ひもれ水よ洩ひて樂と
せんろりろやろぶろんろ八癰疽を西ひもれ水よ洩ひて樂と
ろくろろろ。究竟八理即ふひーぺ大欲を甘ろ欲りろ
仰ろり
妻云宴飲ろりよをぬろてろ西ろろ抓と云字乃
んぺくはしたり。野云ふ西ひぶーんん八　野云ふ溪乃
反語詞　錢あるぺ
ろ伏波ぶろ錢奴ろろ
ろろ　ひ狹八　野云ふ溪乃
ろーくろ　人ぺ
ろんぺ級小男をろ

ようつる而今[而]ぞしゃくしたり　釈[釈]のぎひとりのうれし宴飲あり名をこしらえなさんれるどのつるんをうくもみ一ここんよりハさつ一財をうんこんまハ
そうく富をねがうべし　業ぬんうかうべし
癩瘡をもむこと　腫物八難乳基一こ疥
癬をもうへ　ろをもづしくあくまくまくま

悟了同味悟と云ひしが又本覚位作仏摩訶迦
葉之云生ともいふより脳を按ずに云ふ教義日謂一切衆生
皆有佛性有佛無佛性相常住也又云一色一香無非中道
等言惣是理即次従善知識及従経巻聞見此言為名字即
従教修行為観行即五品位相似位解発為相似即十信分破分見
為分證即従初住至等覚位智断圓満為究竟即妙覚位大欲人無欲
之人仏祖ともに是を貴ぶ事なり
ゆえに
狐疑人よこひうたがふをいふなり狐川面ともに人が狐ろ
ものを狐まくらう仁和寺の僧をとらかす法
師も狐三郎うりてくひつきそうなものよ
ゆえべし

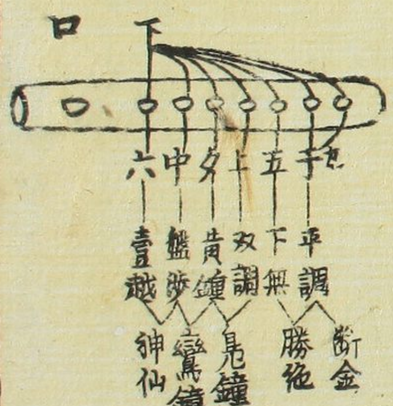
ふるく言ふ疑二疋をはくひぬ二ハみをぬ
法師ハおまる云ふられぬ
ひ法ともなる人をだますよりそう
くこと狐ともさんをそれ
拾遺抄云 まさ久我一門基具大臣堀河基後大
納言父也 野干ともに前
里山乃方は野干あり幸ある
聲と号て説聞るより號へゆくよ説聞るかー西北
方より三聲をゆるよりしかの事 是ま吟云
聖徳よゆるよ仁和寺の僧
まやさんどを寄抄の説しも
まれでゆるよりものんよんべくこう
ゆるよ条黄門ゆるよりて八百ん
ものくぜん自来りて云徳三乃

なんどゝ。横笛のえの乃完を狩つゞく記布の作うかとめそ
う小芸とをねぢそ。そ布ゝ。千の穴八平ノ調えの乃完を下ゝ穴調より
そるよ勝絶調をとるぞてゑ乃完ゆ調次う鬼鐘
調をゝそてゞの完黄鐘調をゝそて
中乃完盤渉調中と六ものあつひよ神絃調ありやう
うるゝよ皆一律をねそめふえ乃元のゝ上乃ゑ小調子
とりしゞくゝそもるゝ事ひとゝまゝ布よゝ多
不快さりされゝ穴をゆくゝのゑあゝねゆ
そゝものよあゝそゞ。吹うる人うゝ
城うり奥ありぬん達にゐ笛をゝ
とゆりさ
ゆ絃八横笛を吹んゞゝうる
ゝうゝくぬ学乃芸物とせゝまてゝるゞ
宝条黄つ 奏云ゆ人笛吹

八中納ゝ乃事をゝ
ゝりり上ゝる人ゝ作ゝゝ
ゑるゝゞ
龍秋
吹家ゝ地下ゝりゑ範陵統
ゝゝゝゝ乃ゝゝゝ
絶ゑ色ゝりゝり
ゝり龍秋が笛
横笛の乃穴

命せゝまて 命ハみゝゝ
奏云楽人のゝゝ芸氏笙と
ゝ退の笛ゝ。奏云乃芸ゝり 警円
奏云ゑるゝ云乃芸ゝり 警円
千ゝ上ゝゝゝ
ゝのるゝ穴ゝゝ

横笛乃図



は当乃圖法あやまりありやいま西征をとりてあらぜり。律は寶をうくる事十二律之次第　壹越　斷金　平調　勝絶　下無　双調　鸞鏡　盤涉　神仙　上無

いさゝかもかゝる事なし。

ひそかふあれを考るに

かやうによろこばれし一律をねるふ　律とは調子なり

元ことの調子乃間よられし一調ごとにそなはるまゝ。如圖

調よ呂律とく陰陽あるごとくなり。漢志云陽律為律陰律為呂。律以

鑄氣類物。呂以旅陽宣氣。呂皆旦律。陽統陰也云々。西案

もろふなれ。催馬樂よは呂陽とし一まとし。律と陰と

一秋とんぞ異名とものうりめるごとし

又の元乃ごとよれ百ふ調をとりそ

是十二律の次第乃ごとくなるふ調をとりそ

あるごとく

間をとるまでも

中古元のごとくなりと

あるごとく

吹ごとくなるふ調をとりそ

あれども黄鐘の龍秋が律物乃五音を

調ふ物乃五音をとりうる

もろふなれ

なせ一人乃生乃ちふ生れくるを遍を

學ぶ人なり。物乃五音をとりうるごとくなるふ調をとりそ

むるとありそくんぞ

か物乃一ごとくなる事を

籠子曰後生可畏焉知来者之不如今也

乃ごとくなるふ調。野云論語子罕

と侍りけるとぞ

徙日よ京一夜がよ仆一分終
をらまで吹ぐらりこ笙いまのうちまでぐん
ちぐこてゆくおうしを完ごふ口俗のふ性骨をふ人
てんをいつくまふうぐこんひくへよりうこ
ぐうりもこまをうこんあーくあけをつまみ完よあろ
ううこんぐよをハいづまをうこ呉律乃抽ようれハぐう
ち人のとが也器乃券うりあこそとやこ
あれうりえ糸蒙が性をまぬりちうさんうり 京茂
寿云大祁氏八幡乃山の井と云ふ住をぞ七筆欣地下
の樂人なり 聖冏 笙ハ管抽り
とうぐこ一ゆくよく調子ぬ性骨 天性
るもの器号とり茶るへ
雖よあうぐそとも 首摞巌經目警 琴瑟管 篠琵琶雖有妙音若無妙指終
不能發。汝与衆生亦復如是 野用之

さうよ鏡秋がこあうこうひうそうこ
片律のあうるハぶうハこ
吹人のうぐそとも
雖よあうぐそとこみこよ
をりぬりくこ不性うりなん
茶云上乃茶。茶茂が返着こうり性云山名うん
とはくるさ事也。我名
あうこんこうり。茶事
首摞巌經目警 琴瑟管 篠琵琶雖有妙音若無妙指終
仆くもこ云ぬうこんぐこうこんぐこうこ
こ私うこ乱云ぬ賤くかこ
こ私うこ乱云ぬ賤くかこ
ふうこ圏をうこぐあのせてぐ
行るもこ云ぬ賤くかこ

作らをもて世とせんといそゝのかし
綱乃りをうたゝり。竜象まさごのごとくあつまり
ぬ。二月涅槃会をとげ。三月霊舎までの中乃を指
南とし。秋冬乃ころ一綱をとりもちて。いづまこのあ
もてらの人作らをりとやし

野云ふも雑楽を論ずるの楽の圏乃ごとし。季冬にいたり
ぶ。律の字をもちゐべし。仏教天竺の楽の圏乃ごとくなり。
奥ふかき縁乃ありて綱をとゝのへ。さまざまをいとなみ
天竺 野云。推古天皇の時に。聖徳太子建立多聞毘沙門
塔長。広国乃宝天の像を安置ふかくよろこびうやまふ
季冬にいたるまでとゝのへをはりぬ。元亨釈書云。天王寺
者用明二年八月皇子率官師討物守屋。官師三却。皇子斬白
膠木。刻四天王像。髪中。誓願大誓願曰。官兵得勝當建護世四天王
寺守屋亡乃於玉造岸上。営寺安四王像。分物氏資産納寺。推古

元年移難波荒陵東。改号荒陵寺。又云敬田寺。南北一里。東西
一里餘。有池。号荒陵池。青龍洶湧。背釈迦文仏。号池転法輪。於
此谷時太子為長者聴受供養。故号此地。宝塔大殿對極楽界。
東門云 下畧 伶人
之世伶倫造音楽。故称伶人。
伶官
をさゝくる 圏絃をもて
曲作をせとも 唯範宝縁
をもて人をさとせといへり。あゝそ八六時堂云云
而乃とゐる第九也。晨朝日中
日没初夜中夜後夜。是を六時乃別を法ともをあり
縁構あり。もれどもむ一の縁八一と称八笑ふうせて
いとのそをれまあゝぞと也 第六縁綱のそをの 第六縁

その律のかなり。中央の調なり。又一調なるを細かに分別せばと中下あるべきなり。律の名ハ黄鐘調の名ハ律なり。文選長笛賦に十二畢と異黄帝命伶倫為律。伶倫制十二筒聴鳳鳥之鳴以別十二律。以比黄鐘之宮。故黄鐘宮律之本也。翰曰。六律六呂為十二律。黄鐘律宮声也。宮為君。故為主也

[illegible]

涅槃会　二月

すみの月涅槃経師子吼品第十一之四に。師子吼言世尊。如来何故二月涅槃。善男子二月名春。春陽之月。万物生長。種植根栽花果敷栄。江河盈満。百獣孚乳。是時衆多生常想。為破衆生如是常想。説一切法悉是無常。

聖霊会　二月廿二日

太子乃忌日ゆゑに天王寺にて法事を行ひ。終日雅楽をもよほさるゝなり

指南車

[illegible]

くるまを引ともろふ。此車の上に木人をすへ。一まわりするに。かの人の手。南をさすなり。

[illegible]

指南車ハ。[illegible]

舎衛の三帯の化物をつくりとゝのへ。又周公礼楽舎の前の常院のあるなり。西園寺の鐘黄鐘調なり。祇園寺の鐘黄鐘調なるべしと。是も西園寺の祇園精舎の鐘をうつしかけたるなり。法金剛院の鐘も声をなをしたるなり。

黄鐘調

[illegible]

祇園精舎

[illegible]

祇園精舎の野を平家物語に。祇園精舎の鐘の声。諸行無常の響あり。祇園精舎ハ祇陀大子の園なり。給孤独者金を布てあひたまひて精舎をたてまつる。祇園精舎とぞ云。野云大蔵一覧第二に。経律異相云。佛大祖越須達多長者為ニ舎

衛國。嘗施孤獨故。曰給孤獨因。從王舍城護弥長者家。爲男娉聘因見其家請佛說法。須達本野外道。忽聞佛法生歡喜心。請佛及衛國人多信邪。弟子欲營精舍請佛住。佛默受請。即還。舍利弗指授規則。遍索求地。唯有祇陀太子十頃林木。爵茂幽靜可居。既得勝地。往白太子。太子戲曰。滿以金布地者與之。須達喜云。此園已屬我矣。太子對曰。我戲語。卒爾成契。諍時。首陀大臣爲評議。以太子法不應妄語。價既已決。不宜中悔。須達出金布八十頃。須臾欲滿。尚缺少地。祇陀即語須達。園地屬汝。樹林屬我。其以上佛。捉繩定基之際。舍利弗忽笑。須達問其故。答曰。汝始於此經營而六欲天宮殿已成。汝果報也。即借須達道眼。果見尚舍利弗是六欲天。何處最樂。舍利弗言。第四欲天補處菩薩常彼說法。須達聞言。既出言。既竟。餘宮悉滅。精舍皆成八千二百處。白王遣使請佛安居

釋氏要覽曰。釋迦譯曰。能仁。寂默文類取意曰。非由其言精妙。良由精練行者所居也　玉耀經云。佛在舍衛國祇樹給孤獨園。與大比丘衆千二百五十人俱。皆是大阿羅漢。諸漏已盡。無復塵垢。逮得己利。盡諸有結。正智心解。譬如調馬。一切具足。其心柔和。所作已辦。捨於重任。逮得己義。盡有無本。心得自在。其名曰。舍利弗。大目揵連。摩訶迦葉。阿那律。離越。阿難。羅睺羅。憍梵波提。賓頭盧。劫賓那。大劫賓那。摩訶拘絺羅。薄拘羅。阿泥盧豆。周那。須菩提。富樓那彌多羅尼子。如是等諸大弟子。復有菩薩摩訶薩。文殊師利。彌勒。賢護。正士。善守。善思。善宿。善眼。大威德。如是等菩薩摩訶薩。皆悉逮得無所從生法忍。住不退轉。一生補處。其數無量。不可稱計。

佛告阿難。汝見祇園精舍。衣鉢道具。房舍床榻。飲食臥具。病瘦醫藥。供給所須。一切具足。厭背故。制此堂。今聞名見題悟一切法無彼常故。祇樹給孤獨園。

祇樹給孤獨園經云。緣覺十二因緣院中有大金鐘。風吹音聞八里。近葉佛時。毘沙門天所造。無垢稱經云。佛涅槃經。四般咸聽之。

西望　勘之　拾芥之嚢　嚢紙　東大寺の大堂の鐘名撞也　撞ても洗ても東經たゝよりも洗ふ　洗ふ　洗ふ　

一淨金剛院ハ淺草の裏手にあり。春吟云水邊云淺茅原
山畠の不ぞろひ云ふ處大石乃當てそこもとゝもなりし檀林のごとい
ひしそへ狐嬉しくそなりまもりまれとあるよ
淨金剛院とかや堂とをそ
りまされそこ淨土宗をそ
建治弘安乃比そぶみの日乃教免の法華
經乃布にえをそ井うそろ水年ようそて歌のかるどこひして
をそくそとみ井うそろ
そりし事ようよかんをそ
ふこともそこう待ぶ
つまぬ也ひとそ法華をそ
ありそく法をあり
せくそこんそうそはそ経ぶあ
極いくそくる

法敷ふのうをそうの抱も未の世そ人歌者
あそこふまりゆく事をそり
これ法宇ふ院の年号ふそうなり 桑乃日 建治 弘安 野云
教免 春云東鏡ふ教免とふ役人ふこまそこありぞ淑
まふをくりそうそ。楠河の教免うり乃都ふ野云
貴鑑元三建保六年六月ふ將軍家 實朝 任大將ふ為 拜賀ふ參 鶴岡
陣共江判官能範希夜 宣旨 筆緒ふ細尻 鞘太刀ふ即等三人ふ雜色四
人ふ調度懸一人ふ教免四人 そ
乃世そ抱人そ人そ
とふたそろ
向武抜ふ山抱教免ぶ
つまひぐふ。教免ふろ
ふそ、別ふ事ふ
へ教免乃ふを貴鑑ふ

竹谷高野房ニ一条院ヘ
遊暑ニハ何事ヲ勝利抑
まつこの寶塔中陀羅尼
いつふくハ中納言ニ会
とゐるごと給ふ我
ましまうりつまとも
旨益あるべしと説給
うとゐもてとの世
まうふつさけ
うまれる

此ハ光明真言寶塔中陀羅尼の
事ヲとゐまつ文高野房
とくとゐまつ
竹谷
砂石集ニ浄土宗の
破ス

ゐとゐまつとも
あゐまつとも
ゐまつ
ゐまつ
ゐまつ

陽明門ニ入ル。猶會ノ
ごとくニーーがまへ入くゞり門ニ入
と雖も一くあるべからず。道をもとめ
てこゝにむかひ又ひとつの門ニ入ル。
ここもいつもの如くニーーの地をいでゝ
い登る紀ノ國ぺつの業務ごとくべー
山路をこえ一ノ里ニ入ル。
ここに入ル　　この聖ニ安倍晴明十五代の孫也 有て
陽明頭ニ任ス　　曰ク云々
うけたまはりぬ
穀斛稼而有天下　　中庸ノ文
好ク人助ケ給フ。通憲入ル。
どこぞ我ニひてその禄細とひそかに
そうぞそうさあすこまでもとつてもち
ぬ

ゆひけるぴ藝ニ任ス。禄細かひそかに
ゆひけるぴ藝ニ任ス。禄細かひそかに
ゆひけるぴ藝ニ任ス。禄細かひそかに

元白相よく根深く　野云歌衆紀草、家相続まで語なる歌者のおを句ものそしり紅葉乃李部を　紅葉乃李部を　河内る大監物光り起こ　源光行　源光行　源氏物語河内かたの男源氏物語河内かたの男源氏物語河内かたの男

なある新楽府あり。七徳の舞も引之集巻二に見えり。
それ帥海賓などの弘長の源氏論義などのごとく之集の
楽府の中乃不実をもて沿革もろ事。審をはぶきて
学ぶ人をして惑を為しめざるをもて
事よめるといふべし

楽府　文選西京賦序註に銑曰。楽府。聚楽之所。同。光七
楽府詩註に孟康曰。漢武帝定郊祀乃立楽府。采詩夜誦
趙魏之声以入楽府也

七徳舞　白氏文集三新楽府の序にはじめありしかど舞。楯
と破陣楽の舞とをみつゝ
白氏長慶集七徳舞　註曰　武徳中天子始作秦王破陣
楽。以歌太宗之功業。貞観初太宗重制破陣楽舞。圖
詔魏徴虞世南等為之歌詞。名七徳舞。自龍朔已後詔教
廟享宴皆先奏之。さて
書云白氏文集新楽府註に太宗為秦王破刘武周。軍中相与作秦王破陣楽曲。及即位宴会皆
必奏之。以百九人。被銀甲執戟而舞。凡三変。毎変為四
陣。象撃刺往来。後更名七徳舞　野云十八史畧曰。唐太
宗七年。宴于武門。奏七徳舞。七徳者。蓋取禁暴戢兵保大
之義也　七徳の舞

ものゝ
ひもをゆるやかにしてきる服
又漆冠着　冠をかうぶるといふ服せし人
をいふなるべし
をひもゆるやかにして上中下俗粧をつくりたる程の
名なるべし。西礼にも。二十四翼冠とあり。弱冠
などいふ冠をもかうぶるといふ
理をもてみるべし　芸能和尚　天台座主　参り給
野云退之進学解名　芸者無不

庸　平家物語　いそし家のうち十二巻あり
灌頂巻は平家の人々別人の伝乃至平家
業始の後あらん人々を他巻とを用ゐべし
ふるくとふゆくしくさうり　まて山乃こ
よゆくしくさうり　お云ふ為ぬ乃めりとれさうれ
九郎義経　判官　義経を義朝の
九男ぞと云ふ人々九ろひとのひ。換ケ
くさく。判官を検非違使の尉よ任ぜし人判官
法五位下三河守　範頼　蒲冠者　参河
蒲冠者範頼の事を別巻に出す。又治二年
二位尼　命夜詠　野ゐひ任よ
考みまでに紫宸のうへ八重をうり。又詠
俊頼朝臣　十三代乃孫。美濃
とぶ。補任よそれを云ふ。
うたくまろ八十二巻平家あり。

事象動　又一冊ろ。六人の伝を載ふり。并に
伝男うりあらんび九ひ物語よ
と一事の内よ不同とあり。
たりしハ十六巻あり。又和州ふり来ぬを
ろくみうりしハ廿巻あり。紀又諏訪神
も特くよ不同あり
六時礼讃　法華三昧　僧侶又を
あひめて造りくさうりぞ。
房とう　僧侶ろ女院宮
乃家和ふり。極楽院の御
讃も同じく善観房ぞ
ひ院の六時礼讃法事讃
とうふり
六時礼讃
実院ありひ時よ念仏を勤ふる事乃如

霊應也　仲芳勝尾寺墓縁疏ならびに紀雛像ならびに
るをもり　いとこと　こと雛とう像などの刀筒
みとらぬかあるをも　ゆくるれあるべきそれぞれと絵
細工のまぶきうるはしく
又条の肉裏うへ妖物ありうそ
尼とへくもまた暴をうちうふ泥障をうごけて
ふる物ありそのそとうんむさまれを狐人のやうまはあく
てさしうちさまある紙のあ
まげこうりぶ綜のうちてもとまれてぞひ
山路又条のだりまことも物ありうそ
しものうりをうきそ世よりけそのとうでおくうそ
まのうんぎりとうそをうせうそや
又条の肉裏　善勝寺ぱ醍醐院の時勅諚ありそのひ
伝へあり　薮大納云

藤条氏乃大納言ぢいくうり

もあるへくれそ今う宿
おそ狐ぶ綜せおを忠綜とうぶくこうくハ功のうくね狐と
園別当入道ぢさうう紀庵丁ちぬ。或人のとこふくいこ
うし紀経をいさ　ありうそれぞ路人別当入道乃庵丁を
みでやとありへどとぬやくうもいでとあう
ひうう紀別当入道百日の経をとうぶう
を今日うさ給うぞふあ
さうぬそうぶくうぶくうぶく

らぞすゑのよやもそ
つ。例乃兼好の風義多
事云基氏ハ天福二年十一月十七日ニ落ノ於出家ニ法名ハ
定生同事云園八称光院指中納云基家ニ男
うニ仕ぜつまつりゆく
庵丁ちうり　事聖云旨ハ庵丁著のそゞめハ
乃廃流山蔭中納言也
解事を俳よりて氏ニく庵厨のまとうく掌意
もう色へよ庵丁とそへ
ありやそくうちいそん
たゞしハ　事云称豫と云庵丁を不望ニよりて通
さう人まく　さやうの不仮んはう人なくとの義
百日乃程　事云もみ〳〵猶予ふ百日ハりよりて影なき
まぢめてよりそん　銘よさりのべき人あるべくそれと

我昌ニ飛ノ往てまうんとも　ゆめ〳〵く　ゆめうち
知人おうそへ〳〵くまくうち
古反入乃庭　事云画園乃理ニ又現在の所望ニ来た
昭大臣　云宗ニ乃師ニ事也
まく　さやうニ公乃御ニ物ニ参ふ
銘とそうんそ　おしへくまそへと　画面
虚云ぬさたうとの義ニ
ゆうへ〳〵　いとあり〳〵　又兼好も甘んそうち物ニ
大うさ物ニまひて興あくまて
子ぬりまう度うり。まれ人の貌の通なとも法のでなり
まやうよとりなし。あれ人ハ物ニとらせうもいと
てまくてあれをまうむとのひまう。海ての右うりぬ。む
ようくてこのまんとなりひ勝負のまけぞふこと多なと

ようなる事ども。思ひまうけんなどは
皆而一と通りの常経（つねのつね）ならぬ人を要望（えうまう）する物なり
されば而已（のみ）ならず。うちねむり父の
のたまふをひきうけ。さりとてはさりとて
おろそかにもせず。しかとうけとりて。あるひは
此時（このとき）おろかの国の人なども百日の程（ほど）も経（へ）
智（ち）ありしかなどいふ人ありて。其（その）
それを世のさまにてぐんぐんと
妻子（さいし）等（ら）をもつべき物にしてのちは
妻をもよなり経（へ）ある人は世（よ）を経（へ）
一かどの
さしくは　史書（ふみ）乃（の）文
さしくは　賢（かしこ）の説（とく）
ていはの父をさしてそるまんと父（ちち）をそる智（ち）を

ふるまひ　みるまひて　みるみて
そばそろひうざうりての着（き）
あるべきやうもあるまじきやうも
を着（き）をはいろひて而已（のみ）
膳夫（ぜんぷ）のもけまぎ　人（ひと）
ろくまうくまうけて而已（のみ）や
かうこれそれの着（き）。又（また）は膳（ぜん）を
うへ。あてこれそれの物（もの）を供（そな）へ
さまざまに給仕（きふじ）のみにあらず
氣づかひせねばならぬ事（こと）ども
附（つけ）ふりて而已（のみ）ならず。客（きゃく）
指葉（さしば）乃湯（のゆ）をもとりもち
そでうのみの事（こと）のうへ

とりおくさまざまのことがらをもれもなくあつめ記せるものなり
小學曰長者不及不讓言註讓雜之言也あれをわかちいまだしきものに
至所ろくハ愼ミ如シ
と鄕黨乃篇よりいでたるをおもふべし
又あるひと人の許よりおくれる詩箋法帖乃類をさうんとそひとを
先ンじもとめんとするのこゝろばへありてつゐに
ものとらざるあり男乃中にもかゝるありさま
くの柄ありやうだいのものをもとめんで能をおもふべし
だいくふこゝろあくまでは法帖乃ひそかに法をぬすまんとねこ
そねずみやうのものをとらんとするがごとくなりおもふに
くの柄をひとつもちいでぬるのみそはうこゝろ
人傳ふまゝにうつしさ人もまたかくのごとくに

みのるなり
世俗そ書畫ともに舊跡なれば失をいとりそれぞれおのくく
失をのひとくに彼此綴乃字をかくべきものなりこゝに
ものうりこゝひ一詞をことわりそへ今時說聲類乃
乃物ぐるひ　聲云事物統名
要云柄乃字也。琴ならばとゝむ琵琶ならばばち
とゝむ。絃をのぞく。樂人のひそれ柄をいふ。ひそ
注附乃柄ハ云ふ　聲圓
えもくの柄あるごとくのんなるべし。野云和名
云ふ抄　音配和名比佐古　鼓水器也。俗ニ柄ト云ヒ漉ク物ニ一字
くづ　いをとるあみ
ふを　兼好乃ことばなり
のことふ蘇香の樂そのゆきれ人ハ六指舍指中指なり

乃ち是をまねて琵琶と云へり。琵琶も秘曲伝授の沙汰も此
もとより出たる事にや。但辻占の記録より曲あり
めでたき時は一人びきそめ琵琶の外より曲あり
座敷の琵琶共合ずして沙汰もなきをねまと
あつべき事ともあらず
琵琶ひくを
はやくこんをとさー物語師乃はなし
ひとものまねよ ひくくの柄ハようねものよくあらしこより
サーのるくうくうくんとうくんめる
めでたき人々の愼むべーと
ふをひろげてんのありさまのふ
此時お肴乃人数あるまひとせ会せてそのありさまを
思惟すべー

ようなのがのぞくなーと
人をまねびくくやくくし
男女老若さまざまの人さまざまの
ようなのがのぞくなーと
茶のごとくなれども
人とまねびくくやくくし
此時ハおのおのの氣色をうかがひてよきと
対談もあるべし必自慢乃
もものびくくやくくんの
人くらべをいひそめ
ばくくとものんをつくり 人をまねん
琵琶をかのまねびくくやくくし
まねる人くくよ 或ハ
もとも

我こうと上をめさたるさま
ろ　寿云物なれてそ
人となるいぐーろよ　傍若無人（バウジヒ）
人の如く洲さるにぞ
いそんいかてこそ
ろうろうね事なり
てやらんぞまことふ
うよひろうろんさ
寿云此人のぼさあ
寿云此一節ハ人の
ちぐーもうぐー
彼人のいる人が
おこぐうとも
おぐーくいろんと

美（ウル）
うも我ろうふそ
うらくうい　人の
人そのまぐ
ひとの夏乃
ふことのあるふ
くれ世よありめ
おもぐ
さるうらねん
山等二郎人
より一時ぐ
おくまぐ
ぎるり
あーうぐ

和（ふる）　あこひろ
ろうとてゆ
ぐーべ
ぐりつひや
ふてもそ
これでつろ
ひをお
ぐ
ぐ
ぐ

ねー　ある家へ入こそどろ入りてありしが見つけられ
ひるでもねてゐりしかたもなくにげ出んとせしが
の物と入ごゝろせしれのだまされてにげ出ざりしが
つゝゝゝねてもあるべきものにあらず
夢とは此ぜん性を悟ざるゆへ也此ぜん性を悟ざる
てんぢんを編せり。　ねー　ある
あるものゝ　これ善惡ねんを離
うつゝとてさて〳〵ふしぎなるものや
ん若ねんまつたくなくなりしを
とかりしにあらずをぼえたるねんなくなりしを
向感流よりは脫あるを形
ぬけ　善惡ねんを一身の主人公とおもふゆへ
ゐづれの文ことを云ても妄よりおこる

ゐるねんのごとくなるべし。彼あるべしと
とねんは虛妄をいふ
心下目の高主人と共に先實其屋外客不能入と此能
と同じ。　善惡ねんれどもなし
狐鼠のごとくなるべし。向性理大全卷二
と善惡ねんまつたくなくなりしを
向感流よりは脫あるを形
ぬけ　善惡ねんを一身の主人公とおもふゆへ
まづ〳〵ねんのごとくやうなりしを
うつゝねんのごとくやうなりしを
ねー　あるいは　狐鼠文選註
の妖怪をうんなるべし。未魅和名樹神和名あまてるもおけ狐
のあざむきをうけ。山魈字彙ひとりを云
なりぬるくねんなりとあまねし

なげ捨つるあるを見へ
又続ふへきもの有ときは
あるまゝあるへくもあらす
先心の塵垢をのそき
よろつの事ゆるくうつ
うつねんそなりそくん
参玄性理大全潜室陳氏曰人心如
自在不曽迎物之来亦不曽送物之去只是定而應應而
定　野き神秀云心如明鏡臺時時勤拂拭
き胡来胡現漢来漢現　徳
境よきりもの　あるもんそ
幸来一物なきゆへ万事うつりきるをそんとそ
塵多くきものなり
あしき事物をのそきすて塵垢
しくの事羅万象をいとてそ

我ものそうよ今この
をよくもなくやあらんやうに
よろつ千万入ときざし
山岸四面そらふんをきく掃せり　今此
ときくよきりもの
性欲をきくいと
るるやあらんとも
あるときに先空我を虚
舟なりとい
れりそれをふでとやもち
人さかも人あまさにをひて
いめせんそ
伝あるへきなり。浄名経に
さるふもりそんで上人の

さやは獅子乃口よりもちゐいるる
湯ぐらくいふ所は獅子乃首乃下よりこゝへでゝ居あれバ
乳乃ほとふくらんなどいふ
ものゝ形をとりねぐき形
獅子乃首をもやう云ふ物
飛ぶ
あるごとく信ずべきまゝを信ずべし
きおこぶまじきなり　丹波
亀山乃少あり。彩畫爲る乃八幡宮
丹波乃國乃大社と申ようなる
きこえ大社神名帳乃内乃大社と申所
きこえ畫乃大已貴を祭りし
ものゝ又村毒乃祥
非ともいへ
源氏乃ごとき志大乃ごとき
工人倭画祥
若紫乃ごとくして
ひめれあそびもしもうこや
何ぞり
張元八ともいへ
何ん
元日乃節會即位乃儀

大乃あるをあげて実をもちり俗ら祢宜式ら俗り。元日女紀ら俗る大嘗祭(オホムベノマツリ)令ら乃ち苗裔(ミアエ)ら俗り。此ら祢社ら祭ら俗ら。続乃(ツヅキ)ら俗ら。

人ら俗り上人乃ら祭ら俗ら　つふ而ら　同ら乃ら祭ら俗ら　をごろ紀ら　亦ら祭ら俗り。

乃つとふ而ら　をごろ紀ら　亦ら祭ら俗り。

柳箱(ヤナイバコ)ら事ら亦

くゝね里乃みともゆるもみをもてざ伯ようべふ

や年祢なゝ八たくざそふをもふ。まのあり比ゝり紙ひの

つまを亦ゝゆしはく祝(ハフリ)ら亦ら亜ら。箸ころ

ぎんしゝと三条右大臣原柳(ハラヤナギ)ら車ら。動(デウ)ら車ら少将乃家(イヘ)

能去(ノウジ)乃人ゝ(ビト)ら。

ゝとざそふをゝ見給りき

は陸柳箱ら事ら。

委ゝ云祝(ハフリ)ら緒尺。或鞘(サヤ)ら寛(クワン)ら亦ら。追ゝ吾乃時ふ経営(キヤウエイ)ら事ら亦

ふ亜(ダイ)ら。柳をもりて造ゝ。

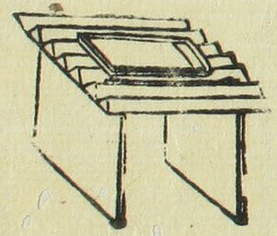
あり。帥(ソチ)ら緒尺をもゝ。

らへらゝ世ゝ三条ゝ三大臣ら家ゝ

乃義あり。ゝ。

ゝ人ゝ主(アルジ)ら前ふ上亦ら。

まの而ら院あるごゝ。



折箱

三条右大臣殿　委ゝ云兼好時代の法とゝ。

像家(ゾウケ)ら絵(エ)ら。或八ゝ(マヒ)ら補任(ブニン)ら。

考(カンガ)ふる右大臣或八左

大臣のくりかへし未曾
世まで行成の子孫絶ざる
陣隨身を召て自儀して七箇条をさだめ
賜ける藏さへ召るゝ事どもありて
自儀乃ち七あり
一云あれより以下兼好ら後人
云 系圖由緒 さて云ふ
ぐ自儀もさる事を記を七ケ条のこゝろ
て兼好もさ称ら哀なる
一人あまさつまでもあり
このる様こゝろもるを
ちくさで馬さつまで
あるに又るをとゞむる
寄る人泥土乃ち
人ふれ感ど
先こゝろ七ケ条ある様一ツ
寂勝光院 野ら拾芥ふ
みます 兼好同乃人
聖云は阿おの乃
ふて同ぐ
一高代のぐ
嵯峨大納言
しよ湯ぬの
まくぶ乃
人ふる感ど
一ツくうさふ
寂勝光院の
聖法性寺建春門院
ふる
野山
動ぐ
云ふ
所
ぐ
ぐ
ぐ

歩(ホ)して事(コト)をもとむ(ママ)(心(ココロ)ばせ)(ママ)(ママ)(ママ

論語あるくだりのことをおがめんと。聖人を尊ぶ
どもなり　ほとゝぎす院乃法師は　先より古人のいまゝの夏
を自慢せり　一例をいへ　一首うちより
先たゞ擬式のまゝ乃八癖のみ同じ病とてあるを墓像乃
ごとし。詞うりくまで　あるとてひつまで
ありふうとうるうるぞ　あるのみのあるうりより　浦さ
汀と同じうりとのまゝ　ありべし　秋の空乃
歌乃んそもぞ死ハあるとも野乃草のごとくおふ
おくまでく種とかもし　行くさうまつ処ぞき
古今よ後あるへハ行乃雑の部んとも　附よあると
つゞく　物四乃時うあるへ　先より定まつ乃ごとく
をうれし　詞うべし　ぱるさ　伊勢紀ふあるや　丁考之
伊通云　おりおより　駿河

佐なとゞもむ時のかん物へくりんのこゝなしどもくらぎや
とゝもむべきこと　或ハ孫子の敬字款苔管切　寛誠也敬也叩一也
常盤光院の法ぎひの　潤書一くふうとせ　一よなの入名投者よ
をゝおくりんを作一よむ乃おりタをとれたあう百里あやま
うりまゝとゝ白あり陽庵の韻と乃百里あやま
つまゝとゝうりをぐそ　なりとそ　半ゝんの好へりとふあやまり作り先
つゞ数打とうとうべしと事作りきぐ数打もいうちう
光孝院　寿云　振金うるの四九あるりあるこゝ
女院　寿云　春淺西二位　菅原家の尾籍の祝　五よう寺
舗方八世乃孫へ野角。　寿云　縫の物を下さぜ

まことの心。神ほとけなどのつげごとー　世にいる人も成ぬる十代の孫と縁事の息行末のすえ
ものしり。いつま　野を模範　無仏　業なき女ー
なり　花のあふ夕をまれ百里ありさまも
鐘乃ものの哀れ知れり　世の常也　無跡迹柳　三面申源　とある
明瞭　長楽鐘声　百里あやまりと
未天乃詞を用ひる白もの　望ハ支腸乃勤もれもなり
ものを知人ぞ詞　よくぞ女也なりー
なり　教訓もいつもの　生業へりひあり
庚申　行の字陽唐韻　ものも
ありー教訓をあり。陽庚韻　種ぬ色
ひくものをいつもの　ものや。ものハ
庚韻なり。ものの美なり。或ハ教訓うと
不審。教を字文なり。種字文也　不労也。
とりつぐをいふ興よりおこり。遠郷の事ハ
書抄ハ人ハ加ふるや。野ハ花ハ
うつろふをいふ。
一人あまことりゐて三塔巡礼乃支仏ー
堂乃うち。龍花院とりくらし
あひだうだひあり。
侍ことぐくあるべー。
程ハいうがさあるべー。
つまり密乃巣ものごとくなり。
名乃ものー。行成位署名字号さだめみて仏ー
人くる奥りいる
三塔　春ハ東塔　西塔　横川へ。三塔巡礼と八臨寺物ニ
塔乃法堂をあがめぐるなり。三塔巡礼記といふ。
ありのこの堂乃いまれまで。
横川常行堂

新拾遺釋教部云やらの
ゆりくる秋 心海上人
神つまぬおろしく
雪ふりて三昧をとる寺ふかく
あるしとまり 佐理
佐理卿。小野。文孫。一条院
野用く 行成 寿三四二位大
院御宇。天禄三年二誕生従一条院
六人勾当補任 参議権中納言 行成卿。国 歴
あれよりまかりて
不動堂 位署
一那蘭陀寺云々 乃眼聖淡義
こまやかにかきつけたり 乃眼
墨。苦。喜。楽。尋。伺。出息。入息。あまた災とのこと
ゆりて 聖同 不化とも
ゆりて 淡義聴聞のつゐて
ゆりくる秋 心海上人
神つまぬおろしく
雪ふりて三昧をとる寺ふかく
あるしとまり 佐理
佐理卿。小野。文孫。一条院
野用く 行成 寿三四二位大
院御宇。天禄三年二誕生従一条院
六人勾当補任 参議権中納言 行成卿。国 歴
あれよりまかりて
不動堂 位署
一那蘭陀寺云々 乃眼聖淡義
こまやかにかきつけたり 乃眼
墨。苦。喜。楽。尋。伺。出息。入息。あまた災とのこと
ゆりて 聖同 不化とも
ゆりて 淡義聴聞のつゐて

賢聖僧正　秀野云醍醐ノ三宝院也日野家ノ人ノ
加持香水　秀野云四月八日ヨリ十五日マデ法
事アリ然ニ此日ヨリ加持香水ヲ汲ムト云フ事ア
リ二壺ヲ汲ムト云ヘリ加持ハ印ヲ結ビ真言ヲ
持ツ事ヲ加持ト云ヘリ
日高野大師神變加持詩又云不測云神異常云變化性來出
入為加摂而不散為持即入我我入也一印一明加持力
成ニモ行者ノ三業ヲ本尊ノ三業ニ入ル行者ノ
三業改テ入義也三密加持速疾顕云ヘリ又佛ヨ應衆生心
水ニ感ヲ加ト衆生心水感佛ヨ持尺セリ所詮者妙感妙應
義也　陳乃かまぜ
座の中ゝくの夏なれば薩の
賢聖像ゑの人ゝ
二月十四日有ゝ

ひゝくゝ
しゝ　賢聖像ゑの業ぬゝ
像ゑをゝゝ
二月十四日有ゝ
てゝゝゝゝ
ゝ優ゝゝ女の姿ゝゝ
膝ゝゝゝゝ
しゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

八月十五日九月十三夜を名残の夜とて

つゐたち月の比ゟぞんの外に雨小降りつゝ
秋の月れいとそらやうふさ〳〵をぐらのやまもと
ゑぼしうちうちかたぶきてとりもあへずとをりすぎ
とりてもやをら〳〵あゆみもやらぬ程に九月十三夜の月を
待ち出でよんをくるゝまでてこゝもとに一夜よゝへぬしこゝ
ろあるうちのこ

婁宿　　奎宿八廿八宿の一つ

宿の字韻會を考るに書洪範晉星辰註星宿晉風
亦音秀この段説いくつもあるなれど
あるべきは野云東方七星。斗。牛。女。虚。危。室。壁。西
方七星。奎。婁。胃。昴。畢。觜。參。南方七星。井。鬼。柳。星。張。翼。軫。北方七
星。角。亢。氐。房。心。尾。箕。二月晦日まで。廿八宿を一星づゝ毎日あてゝまわり
宿るなり。我もろこしもおなじ。暦なれば。日本もおなじ。
さて婁宿は配も良く若緒の初めとて別よろこ

まゐる事なり。中比大内回錄もろ日并宿ありとて。
を除くに廿七宿となん。八月廿五日。九月十
三夜宿よろしからず。八月一角二亢三氐四房五心六尾七箕八斗
九女。十虚。十一危。十二室。十三壁。十四奎。十五婁。十六胃。十七昴。十八畢。十九觜。二十參。廿一井。廿二鬼。廿三柳。廿四星。廿五張。廿六翼。廿七軫。廿八角。

十三婁也

秋の時雨あしく金氣なれば。婁宿の雨乃宿をも
ふれば。ふるなり。ふらねば。ふらぬなり。雨のふりやまぬ
とあり。ふるもふらぬもあしゝ。濁りあり。
うるゆるもあしゝ。ひつそりとふりもやまぬ
ぺし

山路をゆくに雨ふりてあしゝ。

ぬ人をひろひて事こゝにあいるさ一ぢのうちをやうやうおりつゐ
こゝの家り女ん。まだ月のつゐ
もあひこゝわんこゝはゐこゝもあり。
世事二富人親兄弟よ海ゐ
せこゝん。まだ物くまるゐ
こゝ
ゐる紀　こゝ家り他今ねを法師こ　なやーのあづ
こゝ人　ゐーこ回今人ゐ
富のこ家こゐり　こぎてーし紀　妻云
こ女乃。物をさそよ人あーべ　祖父
家妻のこ河樋こゝ　ゐこゐ小野小町をさそり河
まひぬまで首をうゐ芋あ
いゐんこそおりし　おはこゐ詞こゐ
聖玉嬢世。超仙窟よ拉んこ
よいこゐをもひく婚姻

新六今ーこゐ人を何
ねりをあーこの何
ゐこゐこゐ。何こゐ
こゐんこゐ人こゐ
こゐ也　五月のつゐこゐ
こゐ　あゐり発端の心を
こゐ人去ぐて月こゐ
ぎーこゐのつゐこゐ
妻の聖玉施仙山ちぐんひこゐ
さりこり妻今こ山今この乃んこ施仙山ハ事注義
こゐくをいりこゐれど我ありひつまこゐ義山こ
つゐねこゐ紙ゐこゐ
てこゐんこあひこゐ事こゐ也　つき
せねこのこ　妻こつゐこの染こゐ
向礼紀よ聘則　為妻ニ奏ル　為妻ニとのこり。ば時乃ん礼と

男しざうや　若旦那
りくつ　通常ふうてい
中をいつてゝ　妻もの一枚
とうさま　ちやうだ
ちやうりやうとうもろこし
たべてゐるひやうしやこと
寺うめ　ぢいさま
くつゝきもとべい　為
傾城
所をいつぱい　男ばくち
むひやくしん　新ぞうし
ゐるぐうぐう

筆二郎八人よ神ぜてあ
てつひあるゆる死のこふけ
うるゝあるりんくんを
人よゆるしうんなんう
ゐるぞたしひなよう死女
まんそも　ちるくうう
あやーき男のこあふ　男の
神ゝうや　ひあづり人を
いうぐうなるんやい　ろ
まうぐぐしまふたくそも
てぐぐうるとべき寺うり
せうも　人と男ろうをきて
ムをうるう女ろ人うをき
あろうをひやんくも

也昭君乃死給ひもさ事をつゝさゝやくまゝ
おそこんもせをとゝ聞ゆるまゝ
乃人をもとめくのかをあらせり。ばせ紙やう
くおりうまきを取てかんごうよばうをさそつゝおり
画好の画人のかゝりてうをかくべし
望月おまくふくまて病乃をもらくて
乃あるまゝ人おり。彗を易豊卦曰の月盈則食 釈名ニ
曰月蝕也。蒲則政也。望月之満之名也。日月遙相望者也
月も日乃まうをうくるものさ
うう絵かり。日月のめぐりふまくありてつゝくく日
月お望む時月八まこうちうちうちも日月
乃遠遠あまこ夏かばをもくい
まうもゝこゝもくく蝕れどもゝを洗そ人さまこと一教の
うたまこゝ今うあり
病乃ゝうまゝ演うくくへ北窓もてゝふちく
うんくもいまゝ病乃ゝ
年生のゝをは口ひくゝ生れ中よりおりくく乃まゝと成じう
仁字ゝうを俗ちんとおゝ
のゝそむ時ゝ一事もゝ
乃をを悩くゝけるりゝうちうをりて食ゝをまくせを
日りつゝそけう稽ゝ
をくゝ死んと面ゝをうりぬまた我うゝあくゝでとうこと
ゝくをゝねばそゝひのゝ
あうよをくべし
乞より死のちさ事をものして悩忘ぬいさひうり
生れうちおりくくるを成じく 一生涯のくうは
おりくの事をを成就くこと 月の悩をを悔く

如くせよ。悔ゆる心と悔ゆる心とを悔ゆるこころをも悔ゆ
べからず。是の如くせば人々皆仏の如くなるべし。
仏の如くなるべしと雖も仏の如くなるべからず。
何を以ての故に。仏は一切の諸法を観ずるに皆
幻の如しと観ずるが故に。幻の如しと観ずるが故に
一切の妄想を離れ一切の妄想を離るるが故に
一切の煩悩を断ず。煩悩を断ずるが故に
諸法皆幻の如しと観ずるが故に悔ゆる心と悔ゆる
心とを悔ゆるこころをも悔ゆ。悔ゆる心と悔ゆる
心とを悔ゆるこころをも悔ゆるが如く
悔ゆる心と悔ゆる心とを悔ゆるこころをも悔ゆ
ることを得ず。是の如くせば人々皆仏の如くなる
べし。

八十餘年ニシテ死ス云々此ノ文ニ依テ佛ノ入滅ノ年ヲ考フルニ孔子ノ歿後ニ當ル事ハ明ナリ又向ノ人ノ云ク佛ハ孔子ノ後ニ生レタリト云ヒシハ佛ノ入滅ノ年ヲ知ラザルノ人ノ言ナリ又云ク佛ハ孔子ノ後ニ生レタリト云ヒシハ佛ノ入滅ノ年ヲ知ラザルノ人ノ言ナリ又云ク佛ハ孔子ノ後ニ生レタリト云ヒシハ佛ノ入滅ノ年ヲ知ラザルノ人ノ言ナリ

問曰其父母子之子爲何云孫爲何曰爲孫云孫之孫爲何曰爲孫云孫之孫何曰不能知也

佛子悉達多太子十九出家三十成道

檀特山乃阿羅邏仙人之處ナリ

言我等從昔聞如來說法佛告文殊

言過四十一重內大院兼大毘盧遮那說法文殊重白佛言

四十一重內大院何者是耶世尊復言過十住十行十廻向十地等覺內大院兼妙覺地大毘盧遮那說法文殊重白佛言妙覺地畢竟何所

地毘盧遮那。兼無始無終。一心一念。
佛に言。無始無終一心一念。本佛の義。何佛説法世尊後と言。無
始無終一心一念。本佛の義。無心無念。また佛の説法文殊重百
佛に言。無心無念。また佛の義。何佛説法世尊後と言。無心無念
本佛上更に無佛陀。無前佛無後佛。無心無念。佛の不
思議為体。無本来三身性無十界性
ありこの故文のごとくも。もうべきや。われ紙ひんぎりて
生死にこころをつくべからず。又貞観政要の書
あるがごとくこの世のうちに生れ来らば。誰か
根源修行仏のごとくせざらん。報生の死をまぬかれ
しごとくするがごとくふ月おぼれ時
もし真実の底よりもづくして妄執の層よりぬけ
るがごとくんば。成仏もうる事
多くなるべき。法華経の寿量品をひらきて修行をへ
たまうべきなりと。あの心地観経の方便の一遍と。おもえ。前
句は道理なり。後の説いまだ聞かざるべし。いづれをか勝劣
なるべきん 答曰。かくの八衆のかどを已上三の二更を
てひらきて真実のごとくに修行をつみ
ぬれば。ここまでは来れり。ようよう紙のさわりを
知得のようにて後の一乗を聞くべし。ここに
もあんじ。また仁義あり。信よ法のり。乃至 彼
野馳乃喩りにあり。道理ありと紀をおりと
いえどもそこそこまでは八教くべくもろもろ
しもろもろ八儀道とりべく

大ニ驚ともそもくも山葵ハ
をもくく備ハ我こゝろ
強假せくるゝゆゑ
山葵ハ我ものあやまちゆゑ
あくへしりて悪ぬ
つゝしみあり
まことのこゝろハあくを
くらいあつてもむつかしく
人くのゝ
てよきろさをけまの
ろ益ありぬへさまりどゝ。たゝバうまを勝つまそうまを
物まうしもべくんハ只をねよろこんて傾
ごとく又悪ぬ
享保二丁酉年五月吉日

寛文七年ノ十二月吉日

板行

浴陽書林

寺町通二条上ル町　田中庄兵衛
御幸町通綾上ル町　秋田屋太右衛門
寺町通三条上ル町　芳野屋徳兵衛
烏丸通綾下ル町　村上勘兵衛
姉小路通油小路東入町　中川茂兵衛